

留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス ——質的研究手法を使って——

How to form the self-efficacy as the benefit by studying abroad:

Adapting qualitative approaches

奥山和子 (神戸大学 人間発達環境学研究科 講師)

要旨

現在、大学生の海外派遣は短期プログラムが主流となっている。その理由として、まず、短期海外体験で意識醸成を図り、長期留学へ誘発したいという大学側の意図があげられる。本稿では長期留学に着目し、そこで得られる最大の効用とは何かを考察する。長期留学に関する先行研究からは、専門知識や語学能力の習得、人間的成長などの成果が報告されているが、それらがどのような要因とプロセスを経て得られたかが管見の限り見えてこない。そのため、本稿では、質的研究方法を採用することで留學生活の諸相に傾注する。そこで展開される生活のディテールに注目して、留學生活の様子とそれに伴う学生の意識変容を考察した。その結果、留學生活においては、コミュニティへの参加とそこでの活動経験及び達成感などが学生にとって大きな意味をもち、留學を終えた後も、学生に強い自信と人生に対する前向きな意欲を抱かせる要因となっていることが認められた。筆者は、これをバンデュールが提唱する自己効力感だと考え、本稿ではそれを留學経験がもたらす最大の効用とみなす。そして、短期プログラムにおいても、こうした効用としての自己効力感を作り上げる仕掛け作りは可能だと考える。

1 はじめに

朝日新聞と河合塾が、2014年度に全国の国公立大学702校に実施した留學に関する共同調査によると、回答を寄せた609校のうち75%の大学で、1学期程度の短期プログラム、サマープログラム、海外体験・研修を行っていた。また、1年程度の長期プログラムも48%の大学で行われていることがわかった。次に、参加している学生人数をみると、JASSO(日本学生支援機構)のデータによれば、2014年度1学期程度のプログラム参加人数は57,271人で、これは5年前と比べると2.6倍の増加となっている。一方、長期プログラム(JASSOの定義では6か月から1年未満のプログラムを指す)への参加人数は13,198人で、5年前と比べ1.5倍の伸びとなっている。なお、留學の期間とそれに対するプログラム名称については統一された正式な表現がないため、本稿では1学期(4か月程度)以内の海外派遣を短期プログラム、協定校などへの大学派遣を短期留學とそれぞれ呼ぶ。そして4か月から6か月の海外派遣を中期プログラム、さらに2学期間(10か月程度)の大学派遣を長期留學と呼ぶこととする。

さて、話を戻すと、短期プログラムが5年前と比べ2,6倍参加人数を伸ばした理由は、ここ数年の短期プログラムの開発や提供の著しい増加があげられよう。その背景には、グローバル人材育成に欠かすことのできない要素とされる長期留学への参加人数の伸び悩みがある。その解決策として、まず短期間の海外・異文化体験を学生に体験させ、それにより長期留学への関心を喚起したいという大学の思惑があった。加えて、JASSOが3か月未満のプログラムに対して助成を始めたのも短期プログラムへの参加者増加に拍車をかけたものと思われる。しかし、そうした取り組みにもかかわらず長期留学者数に大きな変化は見られない。むしろ、短期プログラムは長期留学へ通じる傍流ではなく、もはや自己完結型の主流になっているのが数字の上からも読み取れる。そして派遣期間の長さゆえ、プログラム開発において教員の質の高い教育的介入が一層求められることとなる。そのため、短期プログラムにおいても、長期留学で得られるような効用が得られればさらに有益性の高いものとなるであろう。

グローバル人材育成の一環としても推奨されている長期留学について、従来多くの先行研究がその成果を報告している。しかし、本稿ではそれらとは異なる手法である質的調査方法を用いて改めて長期留学の効用を考察したい。そのために、まず、長期留学経験者に面接調査を行って留學生活における詳細なデータを収集する。そこから、彼らの留學生活と意識に大きな転機を及ぼしたいくつかの事象に注目し、それらの経験を通して彼らが最終的に抱いたポジティブな境地を、筆者は長期留学の最大の効用と見なすこととする。そして、具体的にそれがどのようなもので、かつどのようなプロセスを経て得られたかを考察し、最後にそれを近年主流となりつつある短期プログラムへの援用の可能性を探るのが本稿の目的である。

2 先行研究

2.1 長期留学に関する先行研究

学生の海外留学は、近年短期プログラムを中心に増加しているが、以前は協定校への長期留学が主流であった。そこには派遣側教員による教育的介入の必要性がなかったため、長期留学に関する先行研究は、学生の異文化接触による意識変容や異文化適応に着目した研究が多かった。例えば、中川(2013)は、1年間留学した学生に対し、ある2つのキーワードに関するイメージの変化を追うことでアイデンティティの変容を観察した。そしてPAC分析の結果、長期留学により学生はポジティブな自己を獲得し、より確かな自我を確立することに成功したと報告している。植木(2012)は、1年間長期留学した151名の学生に対してSEMを使用して変化を分析した結果、言語能力のみならず情意面、特に学習動機が大きく向上したことが把握できたという。また、渡部(2001)は、長期留学が学生の学習や異文化体験に及ぼす影響と効果に関しパリマックス法を使って分析した結果、精神的自立や個人的価値観の形成などで有意な結果を得たと報告している。

これらの先行研究に共通していることは、留学期間を通して見られる意識や情意面など多方面での変化に焦点を当て、それらを測定器により分析している点である。

2.2 短期プログラムに関する先行研究

近年、大学において、海外派遣留学を含めさまざまなプログラム開発が増加している状況を受け、2011年文科省は、「産官学グローバル人材の育成のための戦略」において、「大学の取組成果の可視化」を提議した。これにより、ここ数年増加を加速させていた短期プログラムは、新たにその成果報告を迫られることとなった。

従来、短期プログラムはその期間の短さから語学研修などに目的を特化したものが多い。しかし、語学能力に関して短期間での大幅な向上という成果報告は難しいためか、報告では語学能力の向上と共に、異文化体験による付加価値的側面が強調される傾向がある。例えば、小林(2013)は、4週間の語学研修後に提出された学生による帰国報告書の自由記述欄の内容をもとに考察した結果、語学能力、トラブル・困難への対応力など多くの領域でプラス効果が認められたと報告している。木村(2011)は、3週間の英語研修のデータをもとに、統計的な3元配置の分散分析を行った結果、リスニングなどのスキルに明確な向上が確認でき、併せてメタ認知ストラテジーといった情意面での向上も認められたという。そして、松本(2014)は、3週間の韓国語学研修について、質問紙による単純集計結果より、短期間であってもグローバル人材に必要とされる素養である語学能力の向上や国際社会で生きていくための様々な能力を育成する効果があることが示唆されたと報告している。さらに、秋庭(2012:16)はPaigeを引用しながら「Paige他(2009)は、海外留学の期間とグローバルな視点の習得の相関については、あまり差がないという研究結果を発表した」と述べ、学生の研修後のリフレクション・シートの分析結果より、異文化適応に関する能力が「4週間という短期でも着実に育成されていることが明らかになった」(秋庭:26)と結んでいる。

以上のように、短期プログラムに関する先行研究では多くの成果が語られているが、概ね次のような共通点が認められる。まず、たとえ短期間でも語学能力の向上が認められるということ、次に、異文化理解や異文化適応の促進、そして視野の拡大など多方面において成長を促す成果が確認できたということ、さらに、これらを分析する研究手法として統計的な量的分析が使用されていることである。

この中で筆者が注目するのは、短期間でも異文化理解や異文化適応の促進や成長が認められたという点である。統計的分析において変数をどのように設定するかがポイントだと思われるが、長期留学の効用を考える時、これは興味深い報告である。

2.3 質的研究方法の必要性

留学期間の相違という観点から、長期留学と短期プログラムの二つに分けて先行研究を

概観してきた。しかし、留学の成果という大枠で見た場合、語学習得においても、また異文化体験を通しての多方面での学びにおいても、先行研究はともに留学前後の学生意識の変容を調べ、その変化を数値として実証的に提示してその成果を示している。

しかしながら、こうした先行研究の報告からは見えにくいものがある。それは、一体どのような要因が学生の意識変容を引き起こしたかという点である。これを知るには、学生の留学生活の諸相に注目し、それを詳細に追って考察する必要があるだろう。早矢仕(2002:53)は、「集団全体での変化傾向を量的に把握することも大切なことではあるが、一人ひとりのおかれた立場や経験内容を吟味しつつ比較検討するような質的検討もなくてはならないものであり、(以下、略)」と述べ、量的研究とは異なる視点と手法をもつ質的研究の必要性を指摘している。

そこで本稿では質的研究手法を採用して、学生の留学中の意識変容に着目し、それがどのような要因で生じ変容していくかそのプロセスを考察する。そして長期留学の効用として学生は何を得たといえるのか、さらにその効用を短期プログラムで得られるようにできないかを視野に入れながら検討する。

3 研究方法

3.1 M-GTA の採用

質的研究方法は、一般に面接や参与観察などによって得られた言語データを基づき、人や社会事象を記述しようとする言語を使用した研究方法である。本研究は其中で、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 以下、M-GTA という) を採用する。これはもともとグレーザーとストラウスによって、1960年代に考案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチを、より実践しやすい形に修正した (Modified) ものであり、修正者の木下(2007:35)は、「これ (M-GTA) は、データの解釈から説明力のある概念の生成を行い、そうした概念の関連性をまとめ、まとまりのある理論を作る方法のことである」と端的に説明している。M-GTA の一般的な研究手法を具体的に述べると、まず、研究者が関心を持った現象や課題について、その情報を持っている人と面接してデータを収集する。次に、そのデータに密着 (grounded on data) して、そこで起きている現象のプロセスに注目し、社会的相互関係を考慮しながら、研究テーマに沿って事象を様々な角度から解釈を重ねながら、所与の手順で分析していく。そして、最終的には現象のプロセスを提示するために、結果図というプロセス全体を図示した俯瞰図を作成して、解釈内容を可視化させ、併せてストーリーラインという形でそれを言語化するものである。データを可視化し共有化することで、類似する他のケースにおいても事象の予測が可能となり、類似した課題に対して対策も立てやすくなるということが、M-GTA の有用性の一つだとみなされる。そのため、こうした社会的相互作用のある分野で、かつ研究対象がプロセス的特性を持つ場合にこの分析手法は有効だとされ、近年医療や介護など

多くの分野で使用が高まっている（戈木 2014:31-33）。本研究においても、留学中における学生の意識変容はプロセスを持つと捉えられる点、および留学生活は社会的相互作用があるととらえる立場から、M-GTAによる分析が有効であると考え、採用した。

用語について補足説明すると、M-GTA で使われる理論とは「一般に想像されるような仰々しい理論ではなく、データから抽出した複数の概念（カテゴリー）を体系的に関係づけた枠組みのこと」（戈木：11）である。さらに概念という用語も、複数のインタビューで得られたコメントの中から共通したことを一つの言葉で簡潔に表現したものを意味しており、一般に使われている概念の意味とはかなり異なることを記しておく。

3.2 M-GTA による研究方法

一般的に、統計学を基礎として成立している量的研究方法は、その手法に関して、基本的に誰が説明しても同じになるが、質的研究方法は多様性が特徴であるため、ひとくくりで語ることは困難である（木下 2007:17）。しかも、質的研究方法は、研究者がデータの意味を解釈し、それを重視する立場をとるため、多くの場合、提示された理論の論拠が主観的だとみなされてきた。そのため、木下は、M-GTA の信頼性と妥当性を担保するために、研究発表に際し分析手順の明示化を求める。それは、以下のような7つの手順と技法形式をもつものである。（木下：2007）

- ①研究テーマの設定：研究テーマの意義と目的を明確化する。この研究が何を、なぜ明らかにしようとするかをはっきり提示すること。
- ②分析焦点者の設定：分析焦点者とは面接対象者のことである。M-GTA では面接対象者をデータ提供者と呼び、様々なディテールなど豊富な情報を持っている人を選ぶことを推奨している。
- ③面接法によるデータの収集とデータ化：面接によってデータを収集する。その際、面接内容を録音し、のちに逐語化してデータ化する。
- ④概念の生成：分析は、膨大なデータの中から、研究テーマに関係する具体的事例を見つけ出すことから始まる。その事象に傾注して、その発生理由や展開などについて多角的な解釈や意味づけをする。次に、同様の類似例をデータから見つけ出す作業をくり返し、最終的にそれらの類似事象を1つにまとめ上げる作業を概念生成という。
- ⑤カテゴリーの生成：複数の概念の中から、何らかの共通性を見つけ、まとめたものである。
- ⑥分析ワークシートの作成：M-GTA では分析ワークシートと呼ぶ書式を使ってデータから概念生成を行う。そして、ここには、概念名、定義、ヴァリエーション、理論的メモという4項目を含むことが必須とされる。概念名とは、④で生成した概念に対して、その内容を端的に表す文章であり、それを説明するのが主義である。また、ヴァ

リエーションとは具体例ともいい、面接で語られた具体的な個々の発話のことである。そして、理論的メモとはそれを具体例として取り上げた理由のことを意味する。

⑦結果図とストーリーラインの作成：生成された理論全体を視覚的に図示したものが結果図であり、それを記述化したものがストーリーラインと呼ばれるものである。つまり、ここでプロセス全体が記述されるため、木下(2007:37)はこれを思考の言語化と呼ぶ。

図1は、面接によるデータ収集のレベルから、概念生成そして最終的なカテゴリー生成のプロセスを図式化したものである。

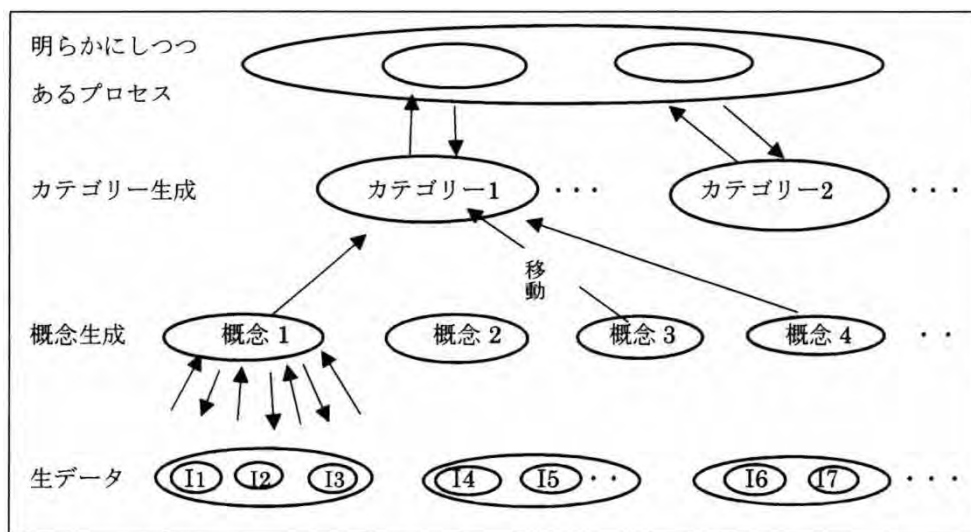


図1 M-GTAのまとめ方(木下2007:209を筆者が修正)

3.3 本調査研究

3.3.1 研究テーマの設定

先行研究を概観することにより、長期留学や短期プログラム参加で得られた様々な成果や知見を確認することができた。しかし、留学中、学生が様々な体験をし、それに伴い考え方、感じ方、自己認識といった意識にも変化が生じるのであるが、その変容プロセスが先行研究からは把握できにくかった。本研究では、こうしたプロセスに注目して分析を行い、最終的に学生が留学体験で得た最大の効用をあげるとすれば、それは一体どのようなものかを考察する。そこで、研究テーマを「留学による効用とその形成プロセス」と設定し、その結果を、現在増えている短期プログラムに採用することで、本研究テーマは意義をもつと考える。

3.3.2 分析焦点者の設定

M-GTAにおける分析焦点者は研究分析の対象者であり、本研究の場合は長期海外留学

経験者を指す。予め 10 数人の学生に対し質問紙調査を行い、その中で豊富なディテール情報を持っている 4 名を選んだ。約 1 年の留学経験者 3 名と、比較のため半年の留学経験者 1 名である。分析対象者数が少人数でも実施できるのが質的研究の特徴でもある。

M-GTA では、面接対象者をデータ提供者と呼ぶ。そして、データ解釈上意味がなければ研究報告書においても彼らの基本属性は原則上取り上げない。それは、M-GTA の手法がデータ提供者に共通した特性を理論化していくため、彼らの個別性は関係しないと考えからである。しかし、本稿において、データ提供者の基本属性を情報として提示することが研究説明の理解をサポートすると考え、敢えて表 1 にデータ提供者の基本属性を明記する。

表 1 データ提供者の属性

データ提供者	留学先	留学期間
A	オーストリア	約 1 年
B	ロシア	約 1 年
C	イギリス	約 1 年
D	ブルガリア	約半年

3.3.3 面接法によるデータの収集とデータ化

本調査では 4 名のデータ提供者一人ひとりに 1 時間半から 2 時間にわたる半構造化面接を行った。質問内容は、本研究テーマに即したもので、①留学動機、②ホスト国（留学先の国のこと）での主な活動、③ホスト国で長期間関わった人、④将来の進路希望、などである。その際、本調査の概要と調査目的を説明し、かつ倫理的配慮を伝え、データ提供者の許可と了解のもとに IC レコーダーに録音を行った。その後、生データを逐語化し、データ化した。

3.3.4 概念の生成及びカテゴリーの生成

4 名のデータ提供者から得られたデータを、本調査研究の研究テーマである「留学による効用とその形成プロセス」という点に着目して、M-GTA の手法に則り吟味した。その結果、最終的に 20 の概念を生成し、その後概念同士の関係性に注目して、さらに抽象度を上げて 6 つのカテゴリーを作成した。それをまとめたものが表 2 である。6 つのカテゴリーの中で最も重要だと思われるのは、筆者が《自分を磨く鍛錬の場としてのコミュニティ》と命名したものであり、これを 6 つのカテゴリーの中で最も核心となるコアカテゴリーとして位置づけた。本稿の場合、各カテゴリーは、留学当初から帰国まで、時系列に従って変化した内容となっている。それらは、留学当初の言語能力不足に起因する種々の困難や苦悩から始まり、やがて言語能力の獲得と共に気づく文化的な相違と現実、それと同時に

データ提供者の意識に上り、かつ深化する文化的アイデンティティ、そして、地元コミュニティ参加により居場所を見つけ、そこでの鍛錬と移っていく。一方で、常に留学生生活全般に強い影響力を及ぼしている日本とのつながりの実態があり、そうしたすべての経験を通して最後に自信や自己成長感を獲得するといった流れである。なお、表2で記した概念【】の前の数字は概念作成上の作業番号である。

表2 カテゴリーと概念の関係

(〔〕 カテゴリー、【】 概念、《》 コアカテゴリーを表す)

カテゴリー	概念
[ホスト国言語能力の必要性を痛感]	2 【意思伝達できないため生じる不利益感や欲求不満】 9 【外国人が特別視されない多様な社会の認識】 19 【外国人留学生としての厳しい勉学の現実】 17 【明確な留学目的を持つことにより見つけやすい方向性】 15 【語学能力習得への集中を決意】
[自分自身への気づき]	8 【“言っちゃえ” と行動開始】 5 【今まで知らなかった自分の発見】 4 【異文化コミュニケーションの“ひりひりする” 厳しさ】
[文化アイデンティティの意識の強化]	3【異文化生活での驚き】 6【日本文化への意識の深化】 7【日本についての質問】
《自分を磨く鍛錬の場としてのコミュニティ》	1【コミュニティへの主体的参加】 13【コミュニティにおける役割の獲得】
[日本の強い引力]	18【就職活動への不安感】 11【ホスト国滞在の日本人との交友】 12【日本に錨をおろしたままの浮遊】
[柔軟性に富む将来像の獲得]	20【達成感の実感】 16【自己変容意識】 14【他者からの評価の必要性】 10【卒業後の進路選択肢の増加】

(筆者作成)

3.3.5 分析ワークシートの作成

M-GTA の分析手法の特徴は、分析ワークシートの作成という技法にある。分析ワークシートには、既述したように、基本情報として、概念名、その定義、そしてそれを支える具体例としてのヴァリエーション、それを選んだ理由としての理論的メモの4項目が記されることとなっている。

表2は、筆者が《自分を磨く鍛錬の場としてのコミュニティ》と名付けたコアカテゴリーに含まれる概念2つの内、作業番号13【コミュニティにおける役割の確保】の分析ワークシートを例として取り上げたものである。最も重要なコアカテゴリーに内包する概念のうち、これが重要だと思われるので分析例として例示する。実際は概念ごとにすべてこのようなワークシートを持つことになっている。

6つ生成されたカテゴリーの中で、筆者がコアカテゴリーとみなした理由は、この部分が、研究テーマである「留学による効用とその形成プロセス」と最も強い関連を持つと判断したからである。データ提供者は、主体的に特定のコミュニティに参加し、そこで試練に遭いながらも努力を重ねることでコミュニティ仲間に認められ、それによって自信を得ていく。自己鍛錬する場として、同時にそれによりやがては自信を与えてくれる場として、コミュニティの存在は非常に重要だと筆者は判断する。


表3 分析ワークシート例

コアカテゴリー	《自分を磨く鍛錬の場としてのコミュニティ》
概念13	【コミュニティにおける役割の獲得】
定義	データ提供者は留学当初、言語力不足などからホスト社会に溶け込めなかった。やがて趣味などを通じてコミュニティに参加し、主体的積極的に関わることで成果を上げ、仲間に評価され、ようやくコミュニティの中で役割を得ることができた。そうした一連の試練と評価と居場所のために役割を与えてくれる場の存在は非常に大きい。

<p>ヴァリエーション (具体例)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「留学中にサッカーサークルに所属してまして、最初はドイツ語もしゃべれない状態でサッカーもそれほどうまくなくて、回りみんなオーストリア人で、ドイツ語でしか通じない所に入って、最初はちょっと辛かったですけど、指示出されてもよくわからんと、みんなから「あいつ、できひん奴」だと思われてまして、ずっとパスとかも来なかったり、来てもなんかあんまり期待されてない感じしたんですけど、まあ、途中から少しずつドイツ語もしゃべれるようになってきたんで、みんなに挨拶しやりとか、話しかけたりだとか、そしたら少しずつ何人かと会話が生まれるようになりまして何人かとは仲良くなって、途中から今日は調子どうやとか、この前サッカー見たかだとかそんな会話もするようになりまして、最後の方は名前も覚えてもらえて、パスも出してもらえたり、で、いいプレーしたら誉めてもらえたりだとか」(A42) ・「あのう私教会とかへ行ってても、仲良くなってくのにやっぱ時間がかかるんです。新しいコミュニティーに入ると時間がかかるので」(B37) ・「(一番の留学の思い出) 舞台。みんなで舞台を一緒に作ったことです。自分の中では音楽観が変わるといふかこの1年間でそれが一番大きかったんですけど、自分が大切にしてきたものへの価値観が変わったのですごく強烈な思い出ですね。音楽に対して私はクラシック育ちなので、自分がやってきたこととは違うことへの興味が出てきたので SOAS には行ったんですけど、でもそういう道のプロフェッショナルの人とか楽譜がないものの中で生きてる人たちを聞いて音楽ってなんやろって何回も思いましたし、いろんな面を見ると、すごくおもしろかったのが一番大きい経験て言うか。やっぱそれがロンドンで生活して一番良かったことかと思います」(C52)
<p>理論的メモ</p>	<p>A42: コミュニティに入り、そこで仲間に受け入れられて行くプロセスが非常にわかりやすい。初めは相手にされない状態だったが逃げ出すことなく挑戦している。これが成功へと導いた要素であろう。</p> <p>B37: ここで分かるのは、コミュニティに入り、そこに溶け込むにはそれなりの時間を要するということである。</p> <p>C52: 音楽仲間と一緒に舞台作りという活動に1年間取り組み、それによって多くの新たな学びと刺激を受けることにより自己成長を遂げている。</p>

(筆者作成)

3.3.6 結果図とストーリーラインの作成

①結果図:生成された20の概念は6カテゴリーに内包されるが、その概念とカテゴリーの関係は図2の結果図に表した。左から右へと時系列に沿ってカテゴリーを提示することにより、プロセスの変容がより明確になると思われる。しかし、「日本の強い引力」と名付けたカテゴリーだけは、結果図全体に影響を与えているものとして、時系列のカテゴリーとは別に右上に置き、かつ  の図形で全体に影響を与えていることを示した。データ提供者は、一見、自立して海外で孤軍奮闘しているように見えるが、実際の所、常に SNS を通じて、日本の友人の動静や就職活動状況といった日本社会の情勢を気にし、情報を集めており、日本とリアルタイムでつながっていることが判明した。筆者による「日本の強い引力」という命名は、海外に居住していても、意識と関心はまるで引力で引っ張られているように留学期間中ずっと日本から離れることができないでいるという意味である。

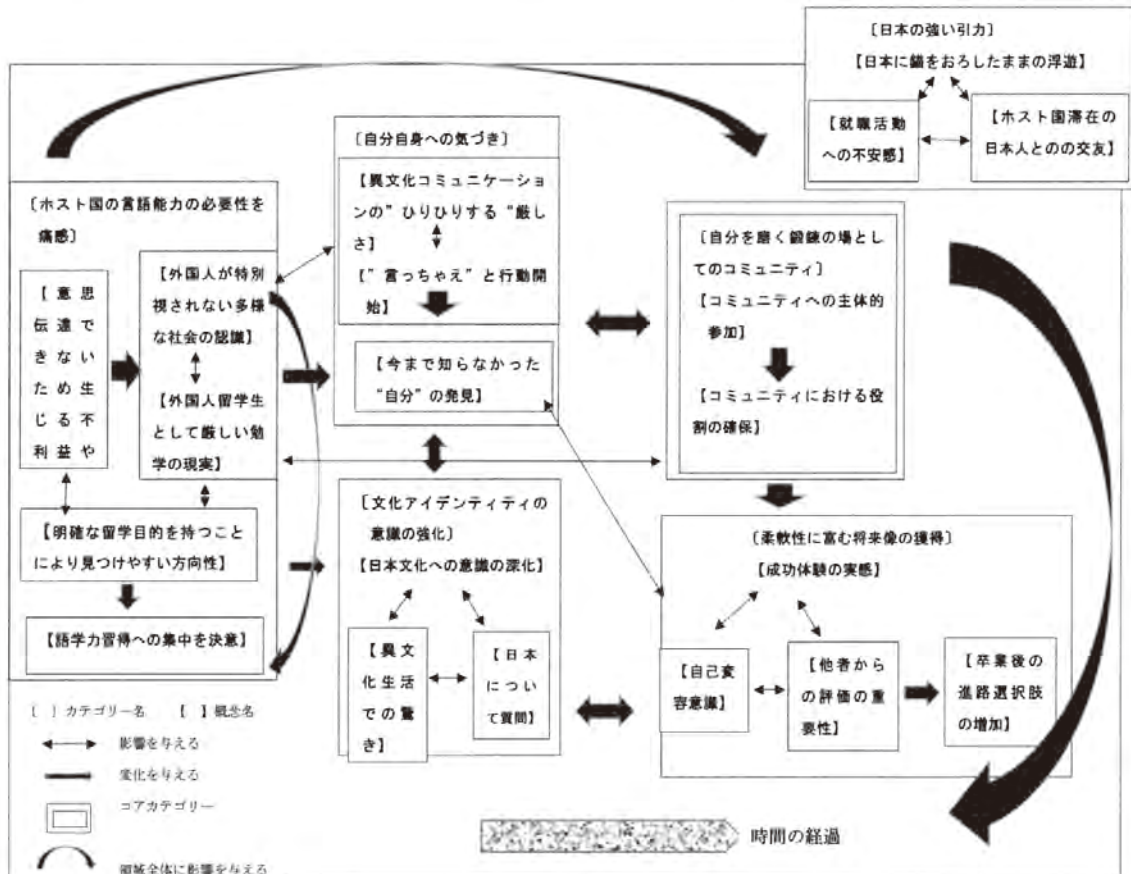


図2 結果図「留学による効用とその形成プロセス」

②ストーリーライン:以下のストーリーラインは分析結果の全体像をコンパクトに言語化して示すものであり、図2の結果図の内容を記述化したものである。

《コアカテゴリー》、[]はカテゴリー、【 】は概念を示す。

「データ提供者の留学生活は、〔ホスト国の語学能力の必要性を痛感〕する辛さから始まる。言語ができないばかりに日常生活や学業にまで支障をきたし、【意思伝達できないために生じる不利益や欲求不満】を大いに抱え込むことになる。外国人の移出入が日常となっているホスト国では、【外国人が特別視されない多様な社会の認識】が必要となる。それゆえ、データ提供者は、外国人であっても特別扱いされることはなくホスト国民と対等に扱われるのである。大学生活においても語学能力不足から授業が理解できず【外国人留学生として厳しい勉学の現実】に直面することとなる。

そうした困難な状況においては、留学目標の存在が取るべき方向性を示してくれる。つまり、【明確な留学目的をもつことにより見つけやすい方向性】を認識することとなる。何のために来たのかという出発点に戻り【語学能力習得への集中を決意】する。語学能力がなければ何も始まらないということを痛感して、習得への決意が形成される。

やがて、ホスト国の人々とコミュニケーションできるようになるほど言語能力が向上すると、皮肉にも【異文化コミュニケーションの“ひりひりする”厳しさ】を体験するようになる。日本と違って、低コンテクスト文化の国では、言いたいことをはっきり言わないと通じないためである。そうした中、ある日、突然ホスト国の人々は、外国人の言語表現の文法的正確さなど気にせず、言いたい内容だけに傾注していることに気づく。文法的に間違っている誰も笑わないということを確認する。そこで、思い切って【“言っちゃえ”と行動開始】をする。そうした気づきを通して、【今まで知らなかった自分の発見】をすることとなる。意外な〔自分自身への気づき〕は、日本の生活文脈の中では生じる機会がなかったかもしれない。

さらに生活が馴れるにつれ、今までは気づかなかった【異文化生活での驚き】も増えてくる。例えば、見知らぬ人と平気でルームシェアしたり、家に招き入れる生活感覚に強い違和感と戸惑いを覚える。またホスト国の人から、【日本について質問】も多く寄せられるようになる。しかし、これまで日本について意識を向けたことがなかったため即答できるほどの知識も意見もなく、改めて日本について考える契機となる。そして、【日本文化への意識の深化】と共に〔文化アイデンティティの意識の強化〕が始まるのである。

一方で、データ提供者はホスト国のコミュニティに関心をもつようになり、【コミュニティへの主体的参加】を果たす。初めは決して順調ではなかったが、努力して結果を出すことで仲間から評価されるようになる。並行して言語能力も向上し、やがて【コミュニティにおける役割の確保】により居場所が見つかる。留学生活全体の中で、これは《自分を磨く鍛錬の場としてのコミュニティ》と位置づけられる。ただ黙ってそこにいるだけでは誰も存在を認めてくれない。外国人だからと言って容赦はしてくれない。それが多文化社会の厳しい現実ともいえる。だからこそ、一番身近で影響力を持つコミュニティのメンバーから認められ評価を受けることで、大きな喜びはもとより、達成感や成功意識も感じるようになる。

異文化社会のきびしさに奮闘する一方で、ラインやフェイスブックといった SNS を通して、時間的にも空間的にも日本の家族や友人とつながっている。体は遠い異国にあっても、心はしっかり日本に根差しているのだ。これは、【日本に錨をおろしたままの浮遊】状況ともいえよう。SNS が発達していなかった昔にあった文化間移動に伴う根こそぎ感といった悲壮感とははや見られない。常時つながっていて情報がリアルタイムで入るため、日本の友人に遅れをとらないように、心は常に日本へ引き寄せられてしまい、そこに〔日本の強い引力〕が確認できる。現代において ICT は遠心力と求心力をもつ命綱でもあり、留学による空白感や喪失感を持たなくてすむための必須アイテムである。また、【ホスト国滞在の日本人との交友】は、情報交換のためだけでなく、帰国後の【就職活動の不安感】を軽減するための精神安定剤でもある。

1年間の生活を通して、順次ハードルを越えることで周囲の信頼を得、達成感も感じ、【自己変容意識】と【成功体験の実感】を得ることができた。帰国後周囲の称賛の言葉や特別視といった視線にますます自信を深める。そこで確認できるのは、【他者からの評価の必要性】である。それにより、データ提供者は一連の〔成功体験の実感〕を強めるのである。語学能力向上や異文化体験というアドバンテージは、【卒業後の進路選択肢の増加】に通じ、それゆえ〔柔軟性に富む将来像の獲得〕が可能になり、こうして長期留学を終えることができるのだ。」

3.3.7 まとめ

ストーリーラインで記述したように、データ提供者は留学当初、語学能力不足などからホスト国社会に容易には溶け込めなかった。やがてコミュニティに参加し、主体的、積極的に関わることで成果を上げ、仲間に評価されその存在と能力を認められるようになった。こうした奮闘努力とその成功を経て、データ提供者は達成感と自信を得ていく。そして、最終的に「やればできる。なんとかなる」という前向きな確信を持つに至る。このプロセスから、最後に獲得した強い自己確信や自己肯定感をもたらした要因が「コミュニティへの参加とそこでの成功体験」にあることが認められる。

因みに、半年の留学経験者も大学の寮に入り、何らかのコミュニティ活動に参加しているが、特に残せるほどの活動実績もないまま帰国の途についている。活動期間で見限り、半年の滞在は有為な体験をするには短いようであり、達成感を示す具体的エピソードは現れなかった。

さて、ここで再度強調しておきたいことは、留学期間全体にわたり、データ提供者が日本へ強く引き寄せられ固執していた事実である。異国に一人置かれ、日本社会から切り離されたように見えるデータ提供者が、実は、ラインやフェイスブック、テレビ電話といった SNS を駆使して常時日本の友人と連絡を取り合い、強く繋がっていた実態である。そこには、かつての長期海外留学に付きまっていた母国社会と断絶された悲痛な思いも孤

独感も見られない。現代の長期留学は、母国の引力に引かれ、時間的にも空間的にも母国から離脱できていないのが実態なのかもしれない。そうした姿に対して、筆者は〔日本の強い引力〕というカテゴリーを立て、【日本に錨をおろしたままの浮遊】と名付けた概念を生成した。友人と同じラインに立っていないと不安だという横並び感が、現代学生の強烈な特徴なのかもしれない。常に友人の姿を確認せずにはいられないその様相に、現代学生の海外留学を阻害する要因として、従来あげられてきた経済的負担や語学能力不安(奥山：2015)とは、別の要因を筆者は感じるのである。それは、友人との同調感を失って、異なる場所や状態に身を置く強い不安感である。そういう意味からも、学生の行動を分析・考察する際、発達段階という視点を念頭に置くことが必要だと思う。エリクソンが、初期成年期における主な関係性を友人とし、そこでの課題を親密性と指摘している点からも、この結果図の〔日本の強い引力〕というカテゴリーは符号するといえよう。

このように、一見研究テーマに即応していないため見逃しがちな事象に、重要な意味を見出すことができるのが質的研究方法の利点であり功績とも言える。質的研究方法は、社会的人間的相互関係という視点で現象を俯瞰できるために、現象の意外な意味や役割に気づかせてくれるのである。

4 自己効力感

データ提供者は、コミュニティに参加し、そこでの奮闘努力が認められたことで仲間の評価を受け、それによって最終的に「自分ならこれからもきっとやれる」という強い自信を持つに至っている。この自信は目に見えるものではないし、数値化して実証できるものでもない。これは単なる思い込みであり、自己暗示でもある。しかし、こうした強い思い込みこそが、次への行動に自信を持って踏み出す強烈な動機付けとなっていることが、本研究より観察された。これはまさに、バンデューラ (Bandura, A) が提唱した自己効力感 (self-efficacy) という概念に当てはまるものだといえよう。そして、筆者はこの自己効力感こそ留学で得られる最大の効用だと考えるのである。バンデューラ (1977) によると、自己効力感とは、自分にはこのような行動がこの程度できるという行動の可能性の認知のことであり、同時に自己に対する信頼感や有能感のことでもある。留学に関する先行研究においても、留学の成果の一つとして自己成長や自信という言葉が散見されるが、これらも、力強く一人で前に踏み出せる勇気を持つという点でその根本に自己効力感があるといえよう。

本研究の場合、面接によるデータから具体的に次のような自己効力感を見ることができる。(傍線は筆者による)

- ①「あとは結果を出すことの大事さですかね。サッカーでもそうですけど、ゴールをバンバン決めたりすると評価も上がっていきますし、ことばがあまりしゃべれなく

でも今まで顔見知り程度の奴が話しかけてくれたりとか。それで、結果を出すのもすごい大事なんやなあとすごい痛感しました。ドイツ語も少しそれに入ってくるんですかね。しゃべれるという結果でみんなに見てもらえるんで。」(データ提供者 A)

②「なんか、自信がつけました。その、どこでも暮らしていけるなって。言葉が(ソフィアでは)全然通じないんですよ。ほかの一般的な店員さんとか駅員さんとかってそもそも英語があまり通じなくて、ブルガリア語しかわかってくれなくて、で、私全然キリル文字も読めなかったけど、すごい必死で独学で覚えてある程度話せるようになって、でやってたら、ある程度買い物したりとかはできるようになって。で、なった時に、こんなにすごく未知の国でも生きていけたわというインフラも整備されてないし、で、言葉も英語も通じひんよなマイナーな言語の地域でも私生きていけたわということは自信になりました。だから、どこの国行っても大丈夫な気がするっていう (略)」(データ提供者 D)

それでは、この自己効力感はどうのようにして形成されるのだろうか。バンデューラは、自己効力感を生み出す要因を先行要因と呼び、具体的に以下の4項目を上げている(バンデューラ :P191)。

- ① 「遂行行動の達成」：これは成功体験のことである。バンデューラは、成功感や達成感をもつという体験が自己効力感を形成する上で最も効果的な方法だという。
- ② 「代理的経験」：モデルを通じた代理的経験のことで、自己効力感の変動に影響をおよぼすものである。
- ③ 「言語的説得」：自己強化や他者からの説得的暗示をうけること、つまり他人から言葉で説得されたり、その他いろいろなやり方で社会的影響を受けることで、自分にはやればできる能力がある、つまり有能感を感じることである。
- ④ 「情動的歓喜」：自己の生理的状态を知覚し、情動的な喚起状態を自覚することである。

ここで留意すべきことは、バンデューラによると、自己効力感を形成する上で、これら4項目すべてを体験することが不可欠だということではなく、こうした項目が自己効力感を形成する上で強い要因となっているということである。その中でも、最も有効なものが①の「遂行行動の達成」、つまり成功体験を持つことだという。

これを本研究結果に照らし合わせてみると、データ提供者はコミュニティでの活動や人間関係を通して、達成感や成功感を獲得して強い自信を得ているか確認されている。これはまさに、「遂行行動の達成」に相応すると考えられる。また本研究で言及したように、デー

タ提供者にとって仲間からの励ましや称賛の言葉は非常に重要で、身近な他者から認められることで、さらに自信を深めることができるのである。そして、これは③の「言語的説得」に当てはまる。

以上のように、バンデューラが提示するモデルによって、留学における自己効力感の形成のプロセスが確認できたと言える。繰り返すことになるが、自己効力感とは、物事に挑む時、自分はできるという強烈な自己暗示でもあり思い込みである。目に見えるものではない。しかし、それが行動を起こす大きな原動力となり、課題に取り組むことができるのである。そして、その成功体験がさらに自己効力感を高め、次の行動へ踏み出すという好循環が生まれていく。こうした正のスパイラルを図式化したものが図3である。言うまでもなく、行動には失敗もつきまとうものだが、自己効力感、自己有能感を持つため失敗をエネルギーに変えるほどのタフさを持つのではないだろうか。こうした意味においても、自己効力感の有無は、留学で得られるスキルや知識などにもまして、生きる上で自信の源泉となり有益なものと思われる。

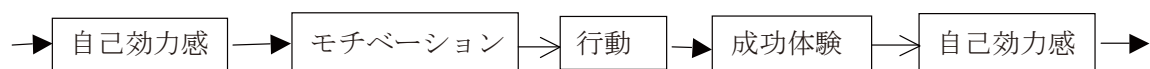


図3 自己効力感の正のスパイラル (筆者作成)

最後に、自己効力感とそれを形成しやすい年齢について付記しておく。その2つの関係について林(2012:135)は次のように述べている。「自己効力は能力を高め発揮する上で極めて重要であるが、海外の研究によると自己効力の生成にとって重要な時期があるという。そして、それは、3歳から4歳時、思春期前期・後期の二つであると考えられている」。つまり、林によると、人生において自己効力感の生成に重要な時期があり、その中の一つが思春期後期であり、まさに大学生の時期である。このように、人間の発達時期の観点からも、大学時代の自己効力感形成は大きな意義があるといえる。

5 おわりに

現在、長期留学者数が伸び悩んでいる一方で、短期プログラムの開発は活発に行われている。その成果も、語学能力の向上をはじめ、異文化理解や異文化適応、あるいは学生の人間的な成長など多くの領域にわたって量的分析を通じて報告されている。そうした活動の背景に、種々な理由から短期プログラムを増やさざるを得ない学内事情や、その実施を推進していくために成果を強調せざるを得ない現実を垣間見ることができるにしても、短期プログラムが着実に成果を上げているのは事実である。こうした中で、筆者の問題意識は、どのようにして留学を通して学生は成果や効用を得るのかというプロセスにあった。しかし、何度も述べたように、短期プログラムの成果に関する先行研究は、大半が量的分

析結果を提示しているため、その成果習得プロセスが見えにくい。そこで、筆者は、留学生活においてどのようなプロセスを経て学生の意識が変容し、最終的に最大の効用を得るに至ったかを考察するために質的研究方法を採用した。本研究は、その報告であった。そこで大きな存在として浮かび上がったのは、学生を心身共に鍛え、人間関係を構築する場としてのコミュニティであった。その場の経験を通して学生が得たものは、「やればできる。何とかなる。きっと自分ならこれからもやれる」という自信と前進する意欲であった。筆者は、これをバンデューラが提案した自己効力感にあたとみなし、こうした強い自己有能感をもった前向きなモチベーションこそ長期留学の最大の成果、つまり効用だと考える。なぜなら、これは今後の長い人生を切り開く上で、何より得難い糧だと思われるからである。

以上にわたり、筆者は質的分析によって長期留学の効用を考察した。残念ながら、分析方法が異なるため、短期プログラムの成果と長期留学の効用を同次元で比較できないことは言を俟たない。

次に、この自己効力感と短期プログラムとの関係を考えてみたい。データ提供者による留学生活の詳細なエピソードと体験は、決して短期経験に還元できない質的なものである。また、筆者が指摘した最大の効用である自己効力感も、コミュニティ参加とそこでの人間関係の醸成を前提とするものであり、必然的に時間を要するものである。数週間の滞在で得られるものではない。しかし、バンデューラが提案した自己効力感を生み出す4つの要因に着目すれば、短期プログラムにおいても自己効力感の形成は不可能ではないかもしれない。つまり、自己効力感を形成する要因としてバンデューラがあげた項目「遂行行動の達成」「代理的経験」「言語的説得」「情動的歓喜」などが得られるような仕組みをプログラムに組み入れることである。例えば、「遂行行動の達成」という達成感を得るには、既成のプログラムを利用するのではなく、学生が主体的に関わることができるように学生によって立ち上げられたプログラムが有効だと思われる。問題意識を研ぎ澄ませ、課題解決へと仲間と取り組む実践的・協働的プロセスの中で、異文化での意思伝達ツールとしての言語能力の必要性を強く認識し、言語能力向上へのモチベーションを得るかもしれない。そして、帰国後は成果発表の場が必要である。他者に評価されることで自己効用感はさらに強まるのである。この部分だけに注目すれば、まさに長期留学経験者がたどったプロセスと類似しているといえる。

最後に、本研究で採用した質的研究方法が、より鮮明に浮かび上がらせた現代学生気質について再度述べておきたい。それは、海外留学に対して最近の学生が消極的な理由についてである。面接を通して筆者に見えたことは、学生間の強い横並び意識や同調意識の存在であり、そこを離れることへの強い不安感である。海外留学への阻害要因は、決して、経費負担の重さや語学力不安だけではないのである。それは、本稿でエリクソンを引用したように、発達段階というステージを念頭において学生を見なければいけないという再認

識である。この時期、最も彼らにとって重要なのは友人とのつながりだというエリクソンの指摘からも納得できる。

以上のような実情を踏まえて考えると、個人行動が前提となる長期留学よりも、学生の集団行動を基本としたパック型の短期プログラムが増加し、需要も多い理由が理解できる。その是非はともかく、短期プログラムの方が、現代学生の実態とニーズに沿っているのだろう。そうであれば、今後さらに開発が求められる短期プログラムに関して、留学の効用を明確に意識したプログラム開発が教員に求められるであろう。

参考文献

- 木下康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂
- 木下康仁 (2005)『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂
- 木下康仁 (2007)『ライブ講義 M-GTA』弘文堂
- 戈木クレイグヒル滋子 (2005)『質的研究法ゼミナール』医学書院
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社
- 秋庭裕子 (2012)「「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の学習成果」『一橋大学国際教育センター紀要』3, pp.15-28
- 植木三千子 (2012)「海外留学は学習者の何を変えるのか」日本英語検定協会「第24回英検助成報告書」 pp.198-209
- 奥山和子 (2015)「もうひとつのグローバル教育について一留学に対する大学生の意識調査から」神戸大学留学生センター『神戸大学留学生センター紀要』第21号、pp.67-85
- 木下康仁 (2007)「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」富山大学『富山大学看護学会誌 6(2)』 pp.1-10
- 木村啓子 (2011)『短期海外研修プログラムの効果と役割』ウェブマガジン「留学交流」12月号
- 小林文生 (2013)「短期海外研修による教育的効果の再検討」一橋大学『人文・自然研究』7, pp.162-185
- 戈木クレイグヒル滋子 (2014)『グラウンデッド・セオリー・アプローチ概論』慶応大学『Keio SFC journal』 pp.30-43
- 中川典子 (2013)「日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ」流通科学大学論集『人間・社会・自然編』第25巻2号, pp.53-75
- 西村薫・野村亮太・丸野俊一 (2012)「自己効力感に関する研究の展望と今後の課題」九州大学「Kyushu University Psychological Research」Vol 13, pp.1-9
- 早矢仕彩子 (2002)「日本人の留学体験と自己に関する意識変化に関する縦横的研究」静岡大学『人文論集』53, pp.39-55
- 林伸二 (2012)「私は何ができるのだろうか」青山学院大学『青山経済論集 47』 pp.107-136

松本久美子 (2014) 「学生は短期語学研修参加によって何を得ているか」長崎大学『長崎大学留学生センター紀要』21-22, pp.47.-62

渡部晃正 (2001) 「留学効果の評価に関する一考察」桜花学園大学『桜花学園大学研究紀要』3,pp.65-80

Bandura A. (1977) “Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change”. Psychological Review 84(2) pp.191-215

www.uky.edu/~eushe2/Bandura/Bandura1977PR.pdf (2016年10月10日閲覧)

Bandura A(1977) “ Self-efficacy: In changing societies” (アルバート・バンデューラ (1997) 本明寛・野口京子監訳『激動社会の中の自己効力』金子書房

Erikson EH : Identity and the life cycle . International Universities Press, New York, 1959. (エリクソン (2011) 『アイデンティティとライフサイクル』(訳) 西平直、中島由恵 誠信書房)

「ひらく日本の大学」朝日新聞デジタル 朝日新聞河合塾共同調査

<http://www.keinet.ne.jp/gl/14/09/hiraku>

(2016年10月15日閲覧)

「日本人の海外留学状況」平成28年3月31日 文部科学省集計

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/

(2016年10月15日閲覧)

